

# 幼稚園児から大学生までの風景構成法の発達的特徴

## - 風景構成法による空間図式の研究 その1 -

正会員 守山敦子\*1

岡崎甚幸\*2

柳沢和彦\*3

風景構成法、枠づけ法、図式

川、描画の発達、風景画

### 1. 背景と目的

子どもの描画発達の既往研究の共通見解として、子どもの描画には人間の描画表現に関わる根源的、普遍的原理が存在するということが挙げられる。生活空間の組織化という主題に関しても、子どもの表現の中に同様の原理が存在するのではないだろうか。

本論では、風景構成法<sup>注1)</sup>による空間図式の解明を目的として、「枠づけ」に着目し、最初に描かれる川が「枠」に対して如何なる形式を取るのかを明らかにする。前回<sup>1)</sup>は被験者480名であったが、今回は1041名を対象により詳細な分類を試みた。

風景構成法において描き手は「風景」という言葉から全体空間を予想して、「枠付け」された空間を自分なりに構造化する。そして川を配置することから全てが始まるのである。川は立面的特徴を持たないため平面的に描きやすいものである。三次元空間の風景の構成を二次元平面に構成する際に、画面は「vistaを予想させる空間」となるが、そこに平面的な川を描くことは困難なことである。それ故、川は描き手の内面に準拠した様々な基準（空間図式）で表現される。また技法の性質上、最初に描かれる川は構成の際に「tree構造の根元」として位置づけられる。そのため、全体の空間構成も川によって規定されると考えられる。

### 2. 被験者および実験方法

被験者は幼稚園児から大学生までの男女計1041人で、その内訳は表1の通りである。

実験はクラス毎に集団で実施した。画用紙はB4サイズ。鉛筆またはペンを使用し、消しゴムは使用しない。「枠」は、幼稚園児の実験では筆者たちが予め各画用紙に記入し、小学生以上の実験では見本を見ながら各自で描いてもらう。着色は色鉛筆で行ない、小学生では一部クーピーを使用したものもある。大学生では着色は行なわなかった。

	男子	女子	計
年中組	14	8	22
年長組	29	30	59
小1	38	37	75
小2	39	36	75
小3	36	35	71
小4	35	36	71
小5	38	36	74
小6	34	37	71
中1	44	41	85
中2	43	41	84
中3	42	39	81
高1	58	42	100
高2	40	39	79
高3	0	36	36
大学生	51	7	58
計	541	500	1041

表1 被験者内訳

### 3. 実験結果および考察

被験者が増加したために、前回<sup>1)</sup>において「先細りの川」および「山から流れ出す先細りの川」に分類していたものの中で様々な形式が見られた。そのためさらにそれらを六つに分類し、全体として15種類<sup>注2)</sup>の川の類型を抽出した(図13)。本論では新たに分類された六つの「先細りの川」について言及する。

#### 3-1. 左右の枠を結ぶ先細りの川(5例)

「枠づけ」された空間が此岸-彼岸を持つ川により上下に分割されて層をなす。さらに川は左右いずれかの枠付近で幅を狭め先細りとなる。彼岸上に家や山が描かれ、それより上部には空が広がるもの(図1)と、彼岸より上部に大地が広がるもの(図2)とに大別される。

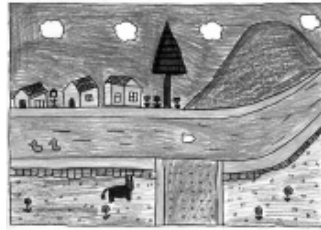


図1(高2女子)彼岸に家、木、山が乗り、さらに雲が描かれ、上部は立面的。



図2(高2女子)左上に山や家が描かれ、彼岸からは離れている。

#### 3-2. 上下の枠を結ぶ先細りの川(46例)

「枠づけ」された空間が川により左右に分割される。さらに川は上部で幅を狭め先細りとなる。上枠付近の構成に着目すると上枠付近に空が広がるもの(図3)と、上枠付近まで大地が広がるもの(図4)とに大別される。前者では上枠付近に様々な構成が見られ、太陽や雲が描かれるもの、川が山の合間を縫っていくものなどがあつた。後者は画面全体に大地が広がり鳥瞰的な視点をとっているが、中には左上に空がわずかに見られる例もあつた。



図3(高2女子)太陽が輝くもと川は上枠に到達している。下部は鳥瞰的。



図4(小6男子)全体に大地が広がっていて鳥瞰的な視点をとっている。

#### 3-3. 上枠と横枠を結ぶ先細りの川(2例)

「枠づけ」された空間が川によって斜めに分割される。さらに川は上枠付近で幅を狭め先細りの川となる。

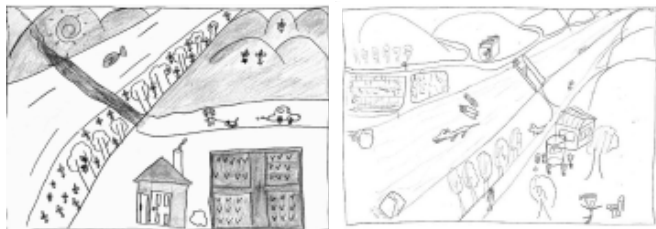


図5(中1女子)川は上枠付近で山間を流れ、左で下枠にもかかるほど広がっている。 図6(大学生男子)川は山に囲まれながら上枠と交わっている。

### 3-4. 下枠と横枠を結ぶ先細りの川 (81例)

先細りの川の中で最も多く見られた例である。川は下枠付近で広く、横枠付近で幅を狭め先細りとなる。ほとんどの場合で山の下端が川の上端よりも高いところに位置していた(図7)。この場合上枠付近が空となり、視点は鳥瞰的となる。しかし中には山の下端が川の上端よりも低いところに位置するもの(図8)も見られた。

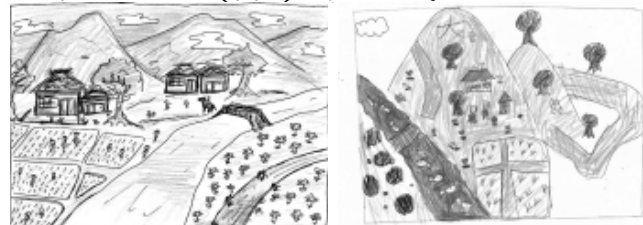


図7(中3女子)川は大地を流れ、空が上部に広がり、全体としてまとまりを感じる。 図8(小2男子)川は山の下端より高い位置で左枠と交わり、空に及ぶ感じを受ける。

### 3-5. 地平線<sup>注3)</sup>と横枠を結ぶ先細りの川 (7例)

「枠づけ」された空間で川が枠の中の一つの焦点と横枠とを結ぶ。川は焦点付近で幅を狭め先細りとなる。ほとんどの場合で川は山と結びついていた(図9)。しかし中には地平線や水平線上に焦点を有するもの(図10)も見られた。



図9(高1男子)川が山と結びついて、滝のように流れ出す印象を受ける。 図10(高1男子)川は山の合間から流れだし、左枠と交わっている。

### 3-6. 地平線と下枠を結ぶ先細りの川 (72例)

72例中27例を大学生が占め、大学生の中でも最も多い事例であった。「枠づけ」された空間で川が枠の中の一つの焦点と下枠とを結ぶ。川は焦点付近で幅を狭め先細りの川となる。3-5と同様にほとんどの場合で川は山と結びついていたが(図11)、地平線や水平線上に焦点を有するもの(図10)も見られた。後者の場合、焦点付近では様々な構成が見られ、何も描かれないもの、池が描かれるものなどがあった。

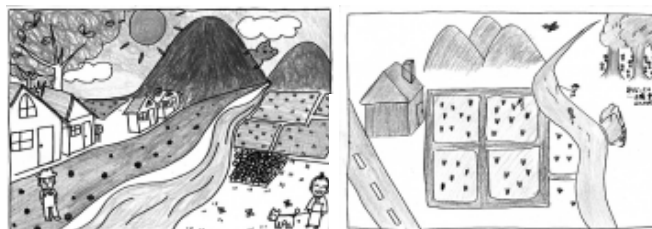


図11(高1女子)川は蛇行し、山と結びついている。 図12(中3女子)山と木立の間を川は抜けて焦点付近には何も描かれていない。

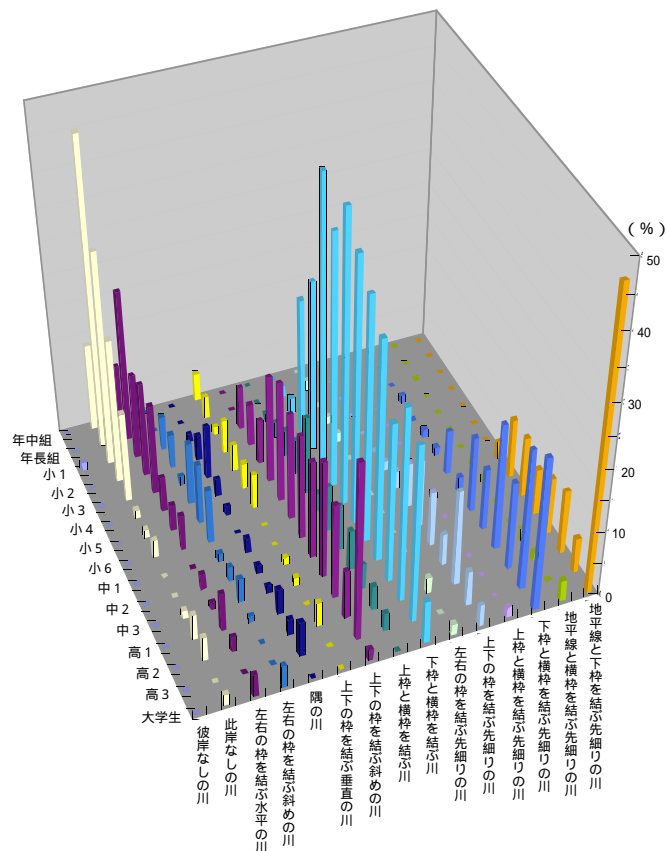


図13 各川の学年別出現率分布

## 4. まとめ

本論では幼稚園児から大学生までの風景構成法の作品を通して「左右の枠を結ぶ先細りの川」「上下の枠を結ぶ先細りの川」「上枠と横枠を結ぶ先細りの川」「下枠と横枠を結ぶ先細りの川」「地平線と横枠を結ぶ先細りの川」「地平線と下枠を結ぶ先細りの川」を見出した。

注

1)風景構成法とは、中井久夫によって箱庭療法をヒントに考案された絵画療法の一つである。まず画用紙の四周に枠を描いてもらう。次に「今から言うものを順番に枠の中に描き込んで、全体として一つの風景となるようにして下さい」と告げ、「川」「山」「田」「道」(大景群)、「家」「木」「人」(中景群)、「花」「動物」「石」(小景群)、最後に足りないと思うものの順で要素を描いてもらい、彩色して完成させる技法である。

2)本論で考察した6種類の「先細りの川」以外に今回新たに見出された川として彼岸なしの川(枠内上部に描かれ、彼岸を持たない川)が1例あった。

3)ここでいう「地平線」とはあくまで便宜上の言葉である。実際は地平線が明確に描かれないことも多い。さらに、川の焦点が山や水平線に結びつくものも、同様の形式と判断して分析を行った。

参考文献

1)柳沢和彦、岡崎甚幸他：「風景構成法の「枠」に対する「川」の類型化およびそれに基づく空間構成に関する一考察」日本建築学会計画系論文第546号 2001年8月

\* 1 京都大学大学院工学研究科 修士課程

\* 2 京都大学大学院工学研究科 教授・工博

\* 3 京都大学大学院工学研究科 助手・工修

Graduate School of Engineering, Kyoto Univ.

Prof., Graduate School of Engineering, Kyoto Univ., Dr. Eng.

Research Assoc., Graduate School of Engineering, Kyoto Univ., M. Eng.